

KSCA 会報

Vol.20 2021.2.20

目次

PAGE 1-2

(1) 小学生対象のワーク

PAGE 2-5

(2) 今の状況だからこそ、できること

PAGE 5-7

(3) 書籍紹介

PAGE 8

(4) KSCA連絡先

(1) 小学生対象のワーク

昨年12月、また勤務先の小学校で授業を行いました。その時の様子をご報告します。この小学校では昨年度、学校保健委員会と人権学習会で授業を行いました。今年度は養護教諭の先生が代わられたのですが、学校保健委員会では引き続き、私が授業を行うことになりました。

しかし、今年度は実施までに紆余曲折がありました。年度当初は6月に行う予定だったのですが、学校再開後もコロナの影響でグループ活動はできず、林「放送で児童個々が作業する形式にしますか?」、養教「いや、それだとせつかくのワークがもったいないので、延期しましょう」ということに。その後も日程や形式の検討、変更を経て、12月に「放送で、児童は各教室に縦割り班（異学年交流）で集まり、個々に距離を取ってグループ活動を行う」ということになりました。ちなみに昨年度は体育館に3~6年生229人を集めて、ワークでは児童どうしにハイタッチなどをさせていました。あの頃は平和だったな...（遠い目）。

しかしそれにしても、放送での授業は、私は初めての経験。できるのか!? 結論から言うと、なんとかできました。まず、テーマは「やる気をつくらう」。内容は「『やる気』ってなに?」「もし○○になれたら」「もしも夢がかなうなら」「かんそう」です。「『やる気』ってなに?」では、やる気とは何か、やる気の出し方などを説明しました。細かい内容は口頭での説明だったのですが、児童はやる気の出し方には興味があったらしく、感想でそのこ

とを書いた児童が多かったです。「もし○○になれたら」と「もしも夢がかなうなら」は、似たワークですが、今回は「やる気を出すために、将来の自分の姿を思い浮かべる。そして夢や目標に向かって、今できることを頑張る」ということに主眼を置きました。

放送での授業のメリットは、①緊張しない、②予定の時間通りに進む。デメリットは、①児童の様子が見えないから、手応えが全くない、②融通が利かない。これだけを見ても、やはり放送よりも、対面で行ったほうが良いなと思いました。しかし授業後、色々な先生に「子どもたちの様子はどうでした?」と聞くと、一様に「みんな楽しく取り組んでいましたよ」という答えでした。感想用紙を見ても「自分の夢を考えて、やる気が出た」「友達の夢が分かって良かった」という感想が多く、思っていたよりも効果がありました。ちなみに私が一番嬉しかった感想は、6年女子の「今、心がもえています」という言葉です。質問も多く、後日答えたプリントを配布してもらいました。

今後は3月に、第2回学校保健委員会で、また授業を行う予定です。形式は放送がほぼ確定、緊急事態宣言が延長したため、今度こそ個人作業になってしまうかもしれません。それでも休校にならない限り、できることはあります。いや、この学校は休校期間中でさえ、「スクールカウンセラーからもメッセージをお願いします」と依頼され、私も動画配信に参加しました。今だからこそできることを模索す

るために、またふさわしいワークを探そうと思いま 引用文献
す。(林 幹夫)

八巻寛治 2001 『構成的グループエンカウンター・ミニエクササイズ56選 小学校版』 明治図書

<p style="text-align: center;">〇〇年〇月〇日 〇時〇分</p> <p style="text-align: center;">()年()組()番 名前()</p> <h3 style="text-align: center;">やる気をつくろう</h3> <p style="text-align: center;">スクールカウンセラー 林 幹夫</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「やる気」ってなに？ 2. もし〇〇になれば <ol style="list-style-type: none"> ① 「もし〇〇になれば」というプリントに、なりたいものと、したいことを書く。2つ書けるといいが、どうしても2つ書けない場合は、1つでもいい。 ② たてわりはんで集まり、ジャンケンでじゅんぼんを決める。 ③ 1ぼんの人から、「もし〇〇になれば」というプリントに書いたものを発表する。1ぼんの人が終わったら2ぼん、3ぼん…とじゅんぼんに発表し、全員が発表する。 ④ たてわりはんの中で、かんそうをつたえ合う。 ⑤ 全体につたえたいことがある人は、手をあげて発表する。 3. もしも夢がかなうなら <ol style="list-style-type: none"> ① 「もしも夢がかなうなら」というプリントに、したいこと、りゆう、ひつようなこと、どりよくしたいこと、どんな人になりたいか、がんばることを書く。全部書けるといいが、どうしても全部書けない場合は、書けるところだけでもいい。 ② たてわりはんで集まり、ジャンケンでじゅんぼんを決める。 ③ 1ぼんの人から、「もしも夢がかなうなら」というプリントに書いたものを発表する。1ぼんの人が終わったら2ぼん、3ぼん…とじゅんぼんに発表し、全員が発表する。 ④ たてわりはんの中で、かんそうをつたえ合う。 ⑤ 全体につたえたいことがある人は、手をあげて発表する。 4. かんそう ★もう1まいプリントをくぼるので、それに書いてください。 	<h3 style="text-align: center;">もし〇〇になれば</h3> <p style="text-align: center;">()年()組()番 名前()</p> <p>◇もしも何かに2度変身できるとしたら、あなたは何になって、どんなことをしたいですか？</p> <p>★もしわたしが <input style="width: 100px;" type="text"/> になれば、</p> <p>こんなことをしたいなあ。</p> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 15px; height: 100px; margin: 10px 0;"></div> <p>2度目は、</p> <p>★もしわたしが <input style="width: 100px;" type="text"/> になれば、</p> <p>こんなことをしたいなあ。</p> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 15px; height: 100px; margin: 10px 0;"></div>	<h3 style="text-align: center;">ゆめ もしも夢がかなうなら</h3> <p style="text-align: center;">()年()組()番 名前()</p> <p>◇もしも夢がかなうなら、どんなことをしたいですか？</p> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 10px; padding: 5px; margin: 5px 0;">もしも夢がかなうなら、 です。</div> <p>なぜなら、</p> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 10px; padding: 5px; margin: 5px 0;">です。</div> <p>その夢をじつげんするためにひつようなことは何？</p> <div style="text-align: center;">↓</div> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 10px; height: 40px; margin: 5px 0;"></div> <p>だから、これからどりよくしたいのは次のことです。</p> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 10px; padding: 5px; margin: 5px 0;"> </div> <p>◇もしも夢がかなうなら、どんな人になりたいですか？</p> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 10px; padding: 5px; margin: 5px 0;"> </div> <div style="text-align: center;">↓</div> <p>だから、これから次のことをがんばります！</p> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 10px; padding: 5px; margin: 5px 0;"> </div>
--	--	--

(2) 今の状況だからこそ、できること

1) 次のステージへの準備

林 幹夫

みなさん、コロナ禍の中、毎日お疲れ様です。できないことがたくさんありますよね。お互いにマスクをしているから、表情でやり取りするのが難しい。生徒や保護者に外出を勧めにくい。児童生徒対象の授業や、保護者対象の講演会を行いにくい。懇親会や職員旅行がない。まだまだたくさんあると思います。

もちろん健康管理や勤務上のルールは大切であり、無理は禁物です。日々の苦労をねぎらい合うのも、支援者としてのメンタルヘルスを保つ上で必要です。しかしできないことを数え上げるばかりでなく、「今の状況だからこそ、できること」に注目しても

良いのではないのでしょうか。

行動分析の考え方に「問題行動を減らすのではなく、望ましい行動を増やす」というものがあります。これをコロナ禍に当てはめると、「できないことを減らすのではなく、できることを増やす」。つまり現状でもできることに注目し、それを増やすことによって、相対的にできないことの割合が減って行きます。それを目指してみませんか？

私がそう思ったのは、もう20年近く前、スクールカウンセラーとして駆け出しの頃、参加した会での違和感に端を発しています。そこではほかのカウンセラーたちが、「うちの学校、レベル下がっちゃって。やっぱり学校全体の学力が落ちると大変よね」「そうそう、問題行動も増えるし。だからやっぱり入試を厳しくして、学力が低い生徒を入れないよう

にしないと」という話をしていました。

私は当時、通信制高校のサポート校（入試での偏差値はなし）に勤務していましたので、「えー、カウンセラーって、問題を抱えた生徒を支える仕事じゃないのか？」という違和感を抱きました。しかしその場では何も言えませんでした。今だったら何か言えるのか、それとも自分もそのカウンセラーたちに染まっているのか、そのあたりの深い内省も重要ですが、それはまた別の機会に。

つまり何が言いたいのかというと、「せつかくカウンセラーという仕事をしているので、コロナ禍の現状を嘆くばかりでなく、むしろカウンセラーとして貢献できるチャンスなのではないか」ということです。そしてこの考え方は、カウンセラーだけでなく、大げさに言うと、人類全体にも言えるのではないのでしょうか。

今から私が言うことは、あちこちで言いながらもなかなか共感を得られないことですが、懲りずにここでも言います。それは、もちろん今回のことで亡くなられた方、病気になられた方、後遺症に苦しむ方、仕事、経済的なこと、家庭などで辛い思いをされた方、不幸な方はたくさんいると思います。しかし今回のことで、人類全体が「漠然とした不安」に強くなっていると思います。人類全体が次のステージに進もうとしています。そう思って乗り越えるのはいかがでしょうか。

話をうんと小さくして、最初のスクールカウンセラーの話に戻します。マスクで表情が見えないからこそ、相手の気持ちを想像し、目から上や全身を見て、声を聞き感情を受け止める力。こちらもマスクで制限されているからこそ、全身や声で相手に伝える力。生徒や保護者に外出を勧めにくいからこそ、在宅で豊かに過ごす知恵を一緒に絞り出す力。授業や講演会を行いにくいからこそ、今のうちにやりたいこと、必要なこと、伝えたいメッセージをストックしておく力。懇親会や職員旅行がないからこそ、限られた時間で何気ないコミュニケーションを大事にしたり、浮いた時間やお金で自分を磨いたりする力。そういう力が鍛えられるのではないのでしょうか。

まだまだあると思いますので、1年前まで考えなかったことを、今の状況だからこそ、これから毎日考え、実行に移して行きませんか？

2) 「しゃべり方」について

稲垣 智則

おそらく、支援活動や心理的なケアについて、皆様が独自に、様々な活動をされておられることと思います。また、パソコンやスマートフォンなどを用いて、ビデオ通話によるカウンセリングの模索なども、今までよりもより活発に採用されているのだらうと思われれます。

私は大学での授業を行うことが主な業務になっております。私などはこういったICTの活用に「置いていかれそうになる」感覚を持ちますが、大学の授業やカウンセリングを「遠隔」で行ってみる中で、「何が共通し、何が新しいのか」を考えざるを得ない部分がありました。手法が新しくなったとしても、根幹にある部分はやはり共通しているのだらうと思いますし、共通していなければ困ります。その根幹部分を再確認する、そういう1年だったように私には思われました。

大学の授業において、ビデオ通話用の技術もなかなかおもしろく、便利に使える部分もあるのですが、その技術に流されて技術自体に凝ってしまうと根幹部分が見失われてしまうことも感じました。カウンセリングや学生との相談において、遠隔で行うことでの難しさも感じました。ただ私が感じたのは、どちらの場合も「声」が重要になるようだ、ということでした。ある意味では「声」が、授業や面接での根幹部分に触れているように感じられたのです。パソコンやスマートフォンを用いると、どうしても映像部分に注目してしまう部分がありますが、臨床心理学的な面接につきましては、映像はある程度「サブ」の位置で考えた方が良いように感じられました。

もちろん、これは私の主観です。すべての状況に当てはまるものとは思っておりません。状況によっても変わるのだらうと思います（遊戯療法や箱庭療法などには適用できない考え方にはなります。手話によるカウンセリングとなれば、音声は関係がなくなります）。ただ、たとえば授業でしたら「ラジオ講座」との比較、面接だったら「電話相談」との比較、という観点は結構重要なのではないかと、思うのです。

「声」と書きましたが、「用いる語彙」「タイミング」「トーン」など、極めて複合的なものです。これらに気がついたのは、パワーポイントに音声のをせて講義をした、大学教員の授業を複数拝見させていただいたときでした。それぞれの先生方とは、直接お話する機会もございましたし、対面授業を聞かせてもらったこともあります。しかしスライドに音声のみであると、その「声」といいますか、「しゃべり方」に、いつもよりも注意が向くのです。そう考えてみると、知っている人と「はじめて」電話をした際、その方の「声」に初めて気がつくこともあったことを思い出しました。

どうして私は、直接お会いしているときには気づかず、スライドにのせた音声や、電話になると気がつくのでしょうか。私がぼーっとしていたということもありますが、おそらく「視覚的要素に、注意資源の多くを使ってしまっている」からなのだろうとは思われました。声に注目する余裕がある、ということでしょうか。

その中で、「あれ？ この先生、発する声の最初のところが、爆発するように始まって、終わりが尻窄みになるな」「とても平板に聞こえてしまうな」、あるいは「温かい印象があるな」「聞いているだけでゆったりした気分になるな」「重低音があって、耳というよりも腹に響いてきて説得力があるな」など、普段は気が付かなかった部分に注意が向くのです。これらの印象が普段の対面状況でも共通するかどうかをこっそり確認していたのですが、やはり、ある程度共通していることがわかります。とすると、私は普段、思っていた以上に「相手の表情」「身振り」「外見」などによって、声から得られる印象を補完（あるいは補正）していたということになります。

私は自分の録音された授業を聞き直し、それを「音楽」として確認してみました。音の「アタック」部分はきつくないか、「サステイン」は長過ぎないか、音の「エッジ」はきちんと立っているかなど、シンセサイザーで音作りをするときと同じような観点からチェックをします。「リズム」が走っていないかなどもチェックします。「声」は、声帯を用いて鳴らしているものですから、チェックするポイントは楽器の場合と共通するのです。

また、音読みだけで読み上げられる用語が「なんのことかわからない」ということにも気がつくので

した。「カンキキュウケイ」と言われて、すぐに「換気休憩」と頭の中で漢字に変換できれば良いのですが、音声のみの場合、この漢字変換がうまくできないと、理解が妨げられてしまうようなのです。ですから、「クウキをいれかえるために、やすみをいれる」と言えば、これはそのまま伝わります。つまり、なるべく訓読みでしゃべれば、そうそう複雑な言葉を用いなければ、言いたい内容が伝わるということでもあるようでした。

思い出すのは、中井久夫先生が記した内容と、糸井重里さんが記した内容でした。まず中井久夫先生の文から引用してみます。

＜患者の音調に二種類あることを書いたことがあるが、サリヴァンがよく患者自身に告げていたことだったのを最近になって知った（小文「アメリカにおけるサリヴァン追認」『みすず』一九七九年六月号）。彼は「君の訓練（トレーニング）の声と君の希み（デザイア）の声とがある」といっていたそうである。おそらく「訓練の声」とは、音域の狭い、平板な声だろう。（…中略…）一般に論弁的になる時、人間の声はそうなりがちである。数学の証明を読み上げる時、上司に問われて答える時、等々。それは防衛の声であり、緊張の声である。これに対して「希みの声」は音域の幅のひろい、ふくらみのある声だろう。患者にせよ、患者でないにせよ、自分の心の動きを自然に表現する時はそうなるものであろう。＞（中井久夫『精神科治療の覚書』日本評論社、p.139）

＜サリヴァンは、患者自身が自分の音調をききわけて自分を知るようにすすめた。＞（同上、p.139）

＜作曲家神津善行氏が書いておられたところによると（昭和五四年七月の『週刊朝日』だったと記憶する）、音域の広い声の人と狭い人とでは、同じことを語っても、相手に受容される程度が大幅に違うそうであり、後者が反発をまねくさまは、氏のようなよい耳を持っている人が横から観察していると、実に驚くほどだそうである。また、そういう人は、他の、対人関係を円滑にする小道具を使ってその短を—それと意識せずにであろうが—補っているそうである。＞（同上、p.140）

これは、私が先に記した「楽器としての声の音」

の部分に関係するだろうとは思われます。遠隔授業やオンラインカウンセリング、あるいは電話相談では、この「対人関係を円滑にする小道具」を用いることができない、ということなのかもしれません。

次に、糸井重里さんの文です。少し注釈を入れますが、糸井重里さんはコピーライターとして有名ではありますが、実はかつて、任天堂の『MOTHER』シリーズというゲームのシナリオやセリフをすべて一人で作っていました。

＜「ゲームの台詞っていうのは、目で読んでいけど、実は耳からくる言葉、つまりナレーションのようなものなんですね。耳からくる言葉は、みんなひらがな。だから、ゲームの台詞も最初っから、ひらがなで考えればいいわけ。よくひらがなだとマヌケに見えるなんて声も聞くけど、マヌケに見えちゃうってこと自体、その台詞を作った人が力量不足なんだろうね。あと、無駄な台詞を入れておくっていうこと、これもゲームでは大事」と、糸井氏はそのコツを語る。＞（山下章（1990）『電脳遊戯考』電波新聞社 p.77 糸井重里へのインタビュー箇所）

これは、「耳で聞いて、すぐに理解できる言葉選び」に関係するだろうと思われます。「耳からくる言葉は、みんなひらがな」というのは、いわば訓読みのこと、言い方をかえれば「やまとことば」ということになります。

このあたりに注目しながらラジオ番組やテレビ、YouTubeなどを見ていると、上手な人と下手な人というのがよくわかるようになります。他にも、映像に

頼らずに状況を説明できる能力であるとか、まるで目の前に風景が浮かぶような表現ができるかであるとか、様々な要素はあるでしょうけれど、根本的な部分は上述の2点、つまり「楽器としての声」の部分と、「耳で聞いて、すぐに理解できる言葉選び」の部分ではないか、とは思われました。

これらについては、単純に「自分のしゃべりを録音して聞き直す」ことである程度訓練することができるように思います。プロのバイオリニストも、プロの役者も、プロのスポーツ選手も、自分の演奏や演技やフォームを、録画して、録音して、チェックします。言語を用いて金銭を取得するカウンセラーも（教員も）、自分の表現手法を録画して、録音して、チェックしてみても良いだろうとも思われます。

幸い、スマートフォンにしてもパソコンにしても、録画・録音機能が充実しておりますので、今すぐにも始めることができます。最初は恥ずかしいものではありますが、なぜ「恥ずかしい」といえば、それはおそらく「思っていたのが、実際よりも素敵」だったからではないか、とも思われます。ならば、せっかくですから、今からでも「本当に素敵」になってみた方が良いでしょうにも思うのです。

これが「今だからできること」なのか、「たまたま環境的に私が気がついてしまっただけのこと」なのか、わからないような文章になってしまいましたが、私は最近、そんなことを考えておりました。

（3）書籍紹介

1) 小栗正幸『健康ライブラリー イラスト版 支援・指導のむずかしい子を支える魔法の言葉』講談社 を読んで

林 幹夫

私は勤務先の小学校では、毎年1回、メンター研修会（経験が浅い先生たちの校内研修会）の講師を務めています。今年度も依頼されました。私はこの学校に限らず、研修会や講演会の講師を依頼されると、東京駅近くの八重洲ブックセンターに行き、参

考文献を探します。

私はこの研修会では、事前に先生たちにアンケートし、日々の指導での困りごとを書いてもらいます。それを当日、Q&A形式で講義します。今回は①「暴言や手が出てしまう児童に対して、どのように支援したらよいでしょうか？」、②「指導したことに納得せず、言い訳を言う児童にはどのように支援したらよいでしょうか？」などの質問が。それに答えるべく、八重洲ブックセンターに向かいます。

コロナ禍の中、果たして八重洲ブックセンター

(これだけ宣伝したんだから、ポイントを増やしてくれないだろうか)の教育コーナーに辿り着くと、1秒でふさわしい本を見つけました。それがこの本、『支援・指導のむずかしい子を支える魔法の言葉』です。前置きが長くてスママセン。

このシリーズはイラストや図が豊富で、ページ数も少ないため、非常に読みやすいです。そして、この本は「まえがき」でも触れられている通り、「子どもの話を聴く」のではなく、「子どもに言い聞かせる」方法が中心です。「傾聴・受容だけではダメ」とハッキリと書かれています。もちろん傾聴・受容も大切ですが、ちょっと想像してみましょう、先生全員がカウンセラーの学校を。それはそれは気持ち悪い学校ですよ。やはり先生たちの指導は「言い聞かせ」が中心で、カウンセラーの論理で傾聴・受容を過信して押しつけてはいけません。

「話が通じない子にはメタ認知の不調があるため、説諭や傾聴よりも、『的外し』と『肯定』を用いた対話が有効」というのが、この本の主張です。暴言・暴力、「死にたい」という訴え、いじめ、不登校などの事例に、「困っていたんだね」「あなたもわかっているように」などの具体的な言葉が紹介されています。発達障害、学業不振の子や、タイプ別保護者との対話の例も載っています。

前述の先生たちの質問、①「暴言や暴力がある児童」には「理由ではなく事実を聞いています」「理由があれば許されますか?」「困っていたんだね」「がまんしていることが多いよね」「あなたもわかっているように」などの言葉、②「言い訳を言う児童」には「理由ではなく事実を聞いています」「そこに気がつくきみはすごい!」などの言葉が有効だと思ひ、研修会で先生たちに紹介しました。もちろんこの本は単なるハウツーではなく、「なぜその言葉が有効なのか」という根拠も載っています。

私はこの本を、研修会以外に、日常の相談でも活かして行きたいです。カウンセラーも「何を聴くか」だけでなく、「何を言うか」ということにも、もっと焦点を当てても良いのではないのでしょうか。この本はそのためのヒントが満載です。もしよろしければ、お読みください。

2) 岸田秀『唯幻論始末記』いそっぷ社 を読んで

稲垣 智則

『ものぐさ精神分析』(中公文庫)で有名な岸田秀先生の最新作でしょうか。2018年発売です。ご本人は人生で最後の本だと記しています。80代半ばで記した書籍になりますが、岸田秀先生の母に対する考察と、日本の(特に)戦後の歴史を組み合わせて綴る、なかなかインパクトのあるものでした。

歴史に疎い私にとって、太平洋戦争での敗戦と、母子関係というものがどう関係するのか、いまいちピンと来ていなかったところがあったのですが、この本を読んで、少し見えてくるものがあったのでした。もしかしたら思想的に偏っているのかもしれませんが。ただ、私には腑に落ちる部分がありました。以下、少し長くなりますが、戦争と日本人の心性に関係する部分を抜き出してみます。

<戦争全体においてもアメリカに負けたのも、アメリカ側の原因はさておき、日本側の原因として、日本が基本的には現実感覚が不全だったということがあり、同じことだが、不都合な現実を隠蔽することがあった。/両者が同じことだというのは、要するに、不都合な現実を隠蔽するのは、あたかも隠蔽すれば不都合な現実が消えてなくなるかのように、消えてなくならないまでも無視して差し支えないほどささいなことになるかのように思っているからである。そのように思うことができるのは、現実感覚が不全だからである。現実が現実としてしっかりと認識されていないからである。(…中略…)いずれにしても、事実を直視せず、その原因を究明せず隠蔽しようとするので、当然のことながら、同じような失敗が再発するのを防ぐことができない。(…中略…)問題はなぜ日本軍は現実が見えていなかったのかということである。> (pp.179-180)

<日本は、屈辱的現実を容認し、現実に対応しようとする外的自己と、屈辱を否認し誇りを保とうとする内的自己とに分裂した> (p.185)

<両自己が分裂している限り、どちらかが否定されている限り、日本はおのれの存在の半分を失っているわけで、誇りを失うか、現実感覚の不全に陥るかのいずれかにならざるを得ない。> (p.190)

くある企てが挫折して大損害を被ったとき、その企ては全面的に間違っていたと考えがちであるが、その企てを計画し実行したとき、それを支えた根拠があったはずで、その根拠に基づくその企ては正当で必要であると思っただけである。すなわち、その企てには少なくとも一部の正当性・必要性があったはずである。それをことごとく否定して無意識へと抑圧し、正反対の企てに走ると、そのうち、抑圧されていた一部の正当性・必要性がぶり返してきて、正反対の企てを背後から不安定にし挫折させるであろう。> (p.192)

く敗戦を終戦、占領軍を進駐軍と言い換えたのが戦後の自己欺瞞の始まりであった。> (p.193)

く好ましくない事実を否認すれば好ましくない事実が消滅してくれるのであれば、これほど旨い話はないが、しかし、個人に関しても集団に関しても、歴史が示しているように、現実隠蔽・自己欺瞞は、必然的に精神の変調を招き、想像も及ばないような甚大な被害をもたらす、いつかは必然的に破綻するのである。> (p.193)

く兵士だけでなく、日本政府がいたずらに降伏をためらってズルズルと先に延ばしていたあいだに、死ななくていい一般民も大勢が死んだ。> (p.218)

これだけ読むと、太平洋戦争に関する私見を述べる書籍のように見えてしましますが、「自分の母親との関係」を想定してこれを書いていたということになります。自分と母親との関係の中にあつたもの、それと同型のものを敗戦時の日本に見た、ということについての本なのです。

日本に暮らしている少なくない人間が、この「型」にはまってしまっていると考えて良いのだろうとも思います。岸田秀先生の言っていることが真実かどうかはわかりませんが、ただ、私自身のことを考えるのであれば、「いたずらに」何かを決定することを「ためらってズルズルと先に延ばして」いる間に、さらにややっこしいことになることはしょっちゅうあります。「好ましくない事実を否認」してい

たことも、振り返って意識化できている範囲のみではありますが、かなりありました。おそらく現在進行形で「好ましくない事実を否認」してもいるのでしょう。岸田秀先生の書いていることは、少なくとも私自身にはかなり当てはまります。

私は何を見ようとしていないのか。何について、私は、私自身を騙そうとしているのか。

これは相当根深く私自身に隠蔽されていて見ることができないと思います。そうでなければ自分を騙すことなどできません。気づいては騙せないのです。それが無意識というものなのでしょう。

本当は腹を立てなければならぬ母親に対して、腹を立ててしまえば「今までの世界が壊れる」ためにそれはできない。だからむしろ、自分は愛されていたという物語にしがみつきます。しかし無意識側は母親に対して煮えくり返るほど腹を立てている。そのために、代理の行為として、母ではない他の誰かに対して腹を立てたり、かみついたりする。逆に過剰に慇懃な態度をとったりする。しかしそれはあくまで代理の行為であるため、際限がない。終わらない。岸田秀先生は、自分自身のことを振り返ってそう記しているように、私は理解しました。しかも、80代半ばでも、母親が亡くなって40年が経過しても、まだしこりが残っているということの吐露でもあります。

岸田秀先生はものすごく頭が良い方なので、さらに裏の裏の裏まで想定して自分自身を分析して行きます。答えには至らず、もう寿命が間近な状態であるにも関わらず、ありとあらゆる可能性を記した上で、すべてを疑問形で終わらせているのです。

それは、誠実な書き方ではないかと私には思えました。

もう一度、『失敗の本質 日本軍の組織論的研究』（中公文庫）を読み直してみたくなりました。きっと、私自身の生き方と同型のものが、この、日本軍の失敗の「型」の中にも見いだせる気がするのです。自分自身への隠蔽、自己欺瞞。そして、虚栄。

(4) KSCA連絡先

メール：office_KSCA@yahoo.co.jp

ホームページ：<http://www.ksca.info/>

(google検索：「神奈川県スクールカウンセラー協会」)